

三人がスミノからの連絡を受け取って武器屋に向かうと、店に入る前から裏手が騒々しい。ユノが耳を澄ますと、何か指示を出すような声が聞き取れた。

「スミノの声だな。中に入って声かけてみるか」

そう言って店の戸を開けると、以前空だった武器立ては所狭しと並べられ、武器屋としての体裁以上のものを取り戻していた。ブランカが声を掛けると、店の奥からバタバタと駆けてくる音と共にスミノが顔を出した。

「いらつしやいませ、ブランカさん御一行様。改めまして依頼を受けていただき、ありがとうございます！」

スミノは額に浮かぶ汗を拭い、深々と頭を下げた。ブランカが「いえ、そんな……」というのを掻き消すように、スミノは頭を上げて言葉をまくしたてる。

「材料が潤沢に揃ったので、ブランカさんに合わせた槍以外にも一通り作ってみましたので、ぜひこの機会に試してみませんか？ いえ、試してみてください！」

情報の整理ができていないブランカは、スミノに店の裏手へと手を引かれていった。ユノとルークもついて行くくと、そこにはスミノの言う通りこの店で取り扱って

る武器が全種類並べられ、試し切り用の藁人形が設けられていた。

「お二人もこの機会に多様な武器に触れてみませんか？ ブランカさんへの助言も、私よりお二人の方が適任でしょうし」

ルークはユノにどうするか尋ねようとしたが、ユノが眉を下げているのに気付いた。

「では、お言葉に甘えて。ユノは……」

「オレは良いや。試す機会はいくらでもあるしな」

そう言うとユノは武器を吟味するブランカに歩み寄った。ルークはその背を目で追った。ブランカが悩みつつも近くにあった片手剣を手に取ったのを見て、ユノは首を傾げた。

「剣、気になるのか？」

「うーん、なんとなく」

煮え切らない返事であったものの、ブランカは丁寧な動作で腕や足の動きを確認するように剣を構えるが、その姿勢はルークにとって見覚えがあるものに似ていた。

「その持ち方さあ、祭りでやる剣舞と同じだな。もしかして知ってるのか？」

ユノもルークと同じものを想起したようで、ブランカに訊ねると、ブランカは少々言葉を詰まらせながら「いえ。なんと、なく……やってみた、というか」と答え、

剣をゆっくりと降ろし、右腕を揉みほぐしながら元あった場所に戻した。

「槍よりも金属部分が多くて、腕を上げているだけで疲れる……」

ブランカはゆっくりと歩き、大剣、金属槍を飛ばして弓を持ち上げた。

「弓も狙いを定める間は腕を使うが、良いのか？」

ルークが確認しようとするも、ブランカは集中して聞こえなくなっているのか、無言で矢を番える。最初は姿勢が良くなかったものの、背筋を伸ばしたり足を開いたりと段々と独りで様になっていった。狙いを定めるその眼差しは真剣そのもので、ルークは次の一言を躊躇った。ユノもその雰囲気を読んで見守る中、ブランカは藁の束めがけて矢を放った。しかし、矢は速度が足りず、すぐ地に落ちていき、ブランカは肩を落とした。

「筋は良いんだけどな……まあ最初はそんなもんだな」  
飛び道具使いとして、ユノも思うところがあったようだが、ブランカが静かに弓を立てかけ直したのを見てそれ以上は何も言わなかった。

ブランカは次に斧を持つとしたが、少しも上がらないのを見てすぐに持ち手を降ろした。その様子を見かねたスミノがブランカに声を掛ける。

「ブランカさんは重い武器は苦手なようなので、軽さが売りの武器はいかがでしょう？ 短剣、鉄拳……投擲具もおすすめですね」

スミノの勧めにブランカはうんうんと頷いてはいるが、目はあちこち見渡していた。スミノが短剣と鉄拳を持つてくると、ブランカはまず短剣を手にした。

「短剣は刃の形が槍に似ていますよね。刃の使い方も似ていて、戦うときは裂くより突く方が得意な武器なんですよ」

スミノはもう一本の短剣を持つと、「見ててくださいいね」と言いながら藁人形へと距離を詰める。そして人形の腹の位置で一突き。引き抜いたかと思えば、空中で逆手に持ち直して、腕部分にもう一突き。藁の束ねてある向きに刃を滑らせてから距離を取って、最後は投擲。残念ながら硬い藁に弾かれてしまった。

「あちゃー、私もまだまだですね」

たはは、とスミノは恥ずかしそうに笑うが、動きはむしろ市井の武器屋にしては上出来すぎる程であった。ブランカはスミノの軽やかな動きを素手で真似し、何か納得がいったように頷いた。スミノはそれを好意的に受け取り、ずいっとブランカに迫った。

「ブランカさんも試してみますか？」

しかしブランカの視線は次の武器へと向いていた。

「……色々、武器の話聞いてからでもいいですか？」

「もっろんですよ。知識は力になりますからね、いくらでも吸収しちゃってください！」

スミノは満面の笑みで答えると、一つ咳払いをして、大きく息を吸った。

「短剣は先ほどお見せしたように相手に近づくことを前提にしながら、投擲することで相手の意表を突くこともできる武器で、扱うには身のこなしが重要になります。ブランカさんは素養がありそうなので、槍使いには縁の少ない、相手の懐に潜り込む胆力がかかなり重要で……」

スミノの流暢に、延々と出てくる言葉の数々に、ブランカ本人こそ真剣に聞いているが、それをぼーっと眺めていたユノは瞼が下がり始めた。

「うーん、学生の頃の座学を思い出すな……ふああ」

「……思い出していることが欠伸なのはいただけじゃないな」  
ルークはうつらうつらとし始めたユノを置いて、ブランカが試していた弓を手を取った。弓は武器の中ではほぼ金属を使わないからか、はたまた冒険者の多いこの町では遠距離を攻撃できるのが他に勝るのか、何本も作り置きされて置いてあったのを思い出した。

ルークは眼鏡を整えると、姿勢の取り方を思い出しながら藁の束に向けて矢を番える。

（余計な思考を、削ぎ落すように……。解析魔法を使う際の意識を集中させる工程にも似ているな）

やがて、ルークの中で己と視線の先のみの世界が出来る。時の流れが緩やかになり、止まった瞬間。右手に保持していた矢、弦だけではない。全身に込められた力を解き放つ。矢は真つすぐに飛び、藁人形にトス、と静かに、深く刺さった。

ルークが一息つくと、ブランカが「わあ……」と声を漏らすのが聞こえてきた。ルークが振り向くと、スミノとブランカが小さく手を叩いた。

「……そう、弓はあのように最後まで集中を切らさないことが大事なんですよ」

スミノはルークの所作を手本にしながら、ブランカに弓の扱いを説く。

「集中……ユノさんの銃もそんな感じでしたね。真似できそうにないです」

ブランカはしおれながらもスミノに勧められた鉄拳を手を取った。スミノは待つてましたと言わんばかりにまたよく回る舌でブランカに説明を始めた。

「鉄拳も短剣と同じく相手の懐に飛び込むような動きを求められますが、こちらはどちらかと言えば力の入れ方の方が重要視されます。試してみますか……いえ、試してみましよう！ なんせこの国でしか普及していない珍しい武器ですので！」

ブランカが驚く間に、スミノのテキパキとした手さばきでブランカは鉄拳を拵えてもらっていた。身に着け終えると、ブランカは藁の人形の前に立った。

「鉄拳は短剣とは逆で、相手に細かく斬撃を与える戦法が多いと聞きます。突くのももちろんできる武器ですが、刃が抜けなくなると一気に不利になるのも事実。初めて扱うのであれば藁を切るには力が要ると思うので、まずは藁の向きに沿って刃を軽く入れて抜くのをやってみましょう」

ブランカはやってみます、と意気込むと藁に向かって腕を振り下ろした。そして腕を引くと。

「あ、あれ」

恐る恐る動かしていたのが悪さをして、藁の束に刃が引つかかってしまっていた。スミノも「じゃあ手を元に戻して抜きましょう」と手を取ってブランカを手助けした。

「なかなか臨機応変に戦う方だと思っていました。不測の事態が苦手なようですね。それならやはり今まで使ったこられた槍のように、間合いを取りつつ、いざとなれば簡単に手放せるものが良いのかもしれないませ……あ！」

スミノはブランカが気落ちしつつ差し出した腕から鉄拳を外していると、何かを思い出したように声を上げた。素早くブランカの武装を解き終えると、端の方に掛けられていた長物を持って戻って来た。

「これはまだ試作品なのですが……連邦で発見された古い文献に舶来品として記録されていた槍を再現してみたものです」

ブランカがスミノから槍を受け取ると、大ぶりの重さに若干腕が下がった。ルークとユノも手を止め、珍しい形の槍を持つブランカを見守る。

『薙槍』と言うそうですが、名前通りこの特徴的な大きい刃で薙ぎ払い、斬撃を与える武器……だと思っただけで試してみました。私事が混ざってしましますが、試しに振るってもらえますか？」

ブランカは刃先をまじまじと観察しながら、手の持ち方をコロコロと変え、一つ一つの姿勢での感触を確かめていた。スミノの言葉に静かに頷くと、ブランカはいつもと同じように構えた。そして機を見て一歩踏み込み、薙槍を振り下ろした。刃が地面に当たる前に腕を引き、そのまま横に振る。一振り目で束ねていた紐が切れ、飛び散る前に上下に両断した。

「これ……いつもの動きだよな。なんか……」

ブランカの普段の槍さばきと何ら変わらないはずの動作が、刃の重さ、形が変わるだけで一味違う力強さを見せていた。

(……洗練、いや、最適化された動き。ブランカは槍を『薙ぐ』武器として扱っていた、と)

何より、薙槍を振るうブランカが生き生きとしているように見えた。動きを緩め、ブランカはすつきりとした表情でルーク達の方を向いた。その顔を見て、我慢できなくなったユノが駆け寄った。

「すげーじゃねえか、ブランカ！」

ユノは人目も憚らずブランカの頭をわしやわしやと撫でた。ブランカも「えへへ……」と照れつつも満更でもない顔でされるがまま立っていた。

ルークはやけに静かなスミノの様子を窺うと、スミノは口を手で覆い、感極まって涙を浮かべていた。

「まさかこの場で薙槍の正しい使い方を拝めるとは……。数百年の眠りから、薙槍を復活させられた……！」

ルークはそっとしておくべきと判断し、ブランカの方へ歩み寄った。ブランカもそれに気づき、更に表情を明るくする。

「ルークさん！ 私、この武器がなんか手に馴染んで……！」

失くし物を見つけたような、弾む声。しかしルークは如何ともし難い心中を表に出さないよう口を噛んだ。

古い文献に記され、数百年失伝していた舶来の武器。それが『手に馴染む』。

——大陸の外など無いに等しいこの時代に、ブランカは一体、どこから来たと言うんだ。

〈二十話へ続く〉